
庭のぬくもり（愛犬と過ごした18年）

高原勤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

庭のぬくもり（愛犬と過ごした18年）

【Nコード】

N5454B

【作者名】

高原勤

【あらすじ】

愛犬と過ごした18年、時には癒され、笑わされ、振り回された日々を描きました。

第1話 我が家に犬がやってきた

我が家の庭に犬が来たのは11月に入ってまもなくのことだった。

僕の幼稚園の同級生の白川さんがお母さんとともに一匹のメスの犬を連れて我が家を訪れた。

「町内のはずれの空き地に二匹捨てられてて、うちで引き取ったのけど、さすがに二匹飼うのは大変だし。オスの方はうちで飼うことにしたんだけど、よかつたらメスの方をもらってもらえないかしら。」

白川さんのお母さんが言うメスの犬はまだ目もよく開いていない生まれただけの子犬だった。

「可愛がつてあげてもらえる？」

白川さんも懇願するように言う。おそらくお母さんに二匹とも飼いたいと言ったが、二匹飼うのは無理と言われたのだろうということに想像がついた。

捨てられていたので血統はわからなくて雑種としか言いようがないけど、とにかく可愛いかった。僕と姉兄は一斉に言った。

「うちで飼ってもいいでしょう？」

とにかく飼いたいから、お願いの三重唱だった。姉はこうも付け加えて両親にアピールした。

「私たちが世話するから。えさもやるし、散歩もさせるから。」

ペットを飼おうという時どこの家でも子供がお願い攻勢をするけど、我が家も同じだった。

始めは世話は大変だから、などと渋る両親も僕たちの勢いに負け、その子犬を飼うことに決めてくれた。

しづしづ決めた父も休日になると材料を買いに行き、張り切って犬小屋を作ってくれたし、母もまだ赤ん坊の犬の餌によさそうなものあれこれと探して買ってきてくれるなど、なんだかんだ両親は世話を焼いてくれた。

名前は

「クンクン」

と付けられた。正式には

「高原クンクン」

なぜ正式には、という土地元では犬を飼うと市に登録が必要で、それで市の実施する定期の予防接種を受けたりしなければならぬというのがある。その時、飼い主の苗字と犬の名前をつなげたのが登録名になるのだ。

友達からは

「なんでメスなのにクン（君）なの？」

とよく聞かれるのだけど、それはもらったばかりの時にクンクンが「クウン クウン」

としきりに鳴いていたのでそこから付けたのだった。飼い始めてからもしばらくはしきりに鳴いていた、いや、泣いていたという方がいいのかもしれない。きっと親が恋しかったのかな。

第2話 美味しい話

朝と夜の二回、これがクンクンのご飯の時間。昼間は父母が仕事で僕たち子供は学校でいなくなるため、お昼ご飯をあげられる人がおらず、二回が定着してしまった。クンクンも特にそれに不満はなかったようだ。直接聞いたわけではないけれど。

クンクンはあつという間に大きくなり、いわゆる中型犬くらいになった。ついこの間までかわいい子犬だと思っていたのが、もうりっぱな体格で食欲も旺盛。犬だから肉は大好きで骨付き肉なんかあげようものなら一日中骨をかじってる。ある時、

「ここにおもしろいものがあるんだ。」

と父が言う。父が指し示す庭の奥は土をいじったような跡があった。掘ってみるとそこには骨が。一瞬びつくりしたが、庭の土の中から骨がでてきたからと言って別に事件が起きたわけではなかった。

「前にえさであげた骨だよ。野生の習性のなごりなのか蓄えてるつもりなんだろうな。」

父の話では以前もこんなことがあったそうで、しばらく骨をかじっていた後、突然骨をくわえて庭の奥に行ってしまった、しばらくして戻ってきた時はもう骨はくわえていなかったという。そこに行ってみると、骨が埋めてあった。もつともクンクンが掘り返したのは見たことがない。毎日えさはもらえるから掘り返す必要もないのだから。

えさはなにも肉だけではなくて、ドッグフードもあげる。作りすぎて残ってしまった僕たちのご飯なんかもあげると食べてくれるが、これは助かっている。

ご飯は二回と言ったが、おやつもある。

僕らがお菓子を食べているとねだってくるのであげたりする。クッキー、お煎餅、飼い主の食べるものは同じ様に好きだ。では一番大好きなおやつはと聞かれれば、それは煮干しだと思う。犬が煮干し

なんて、と思うかもしれないけど、たまたまあげたら好きなことがわかり、お菓子よりよっぽど身体にいいと思ってあげている。本当によく食べる。食べだすと止まらないのだ。お前は猫か！とつつこんでやりたくなるくらい。

「食事に昼寝付き、犬は実にいい身分よね。」
と姉は言う。

でもその食事をあげ忘れたことがある。

我が家は駅に向かう時は庭の前の道路を通ることになるのだが、ある時、時間は朝10時ごろだったように思うが、出かけようと庭の前を通るとクンクンがじーっとこつちを見てくる。

「出かけちゃうの？何か忘れてない？」

その目は訴えていた。そのままでは気になって出かけづらい。さてなんだろうと考えて、あつと気が付いたのである、えさをあげてないことに。慌てて家に戻りえさをあげたが、あの時の何ともいえないクンクンの表情は忘れられない。

第3話 新しい家族

我が家も建ってから数年が過ぎ、花壇や植木で庭が賑わうようになったが、それでも庭の中心はクンクンであった。庭のことなら家族の中ではクンクンが一番知っていると思う。犬小屋だけでなく木陰の縁台、あらゆる場所がクンクンの領域だった。トイレもいたるところでするし、時には花壇に入っていたり、草を踏んだり。夏の暑い日は木陰で少し土を掘ったその上にいる。この少し土を掘るとというのがミソで、僕もやってみてわかったのだが、熱くなっている表面とは違い、掘った中の土はひんやりとしているのだ。特に誰かが教えたわけではない。さすがの智慧である。でもあっちこち掘り散らかすものだから、掘られては父が埋め直す、の繰り返しだったのが滑稽だった。

冬の寒い日は日当たりのいい縁台で時々あくびなんかしながら寝そべっている。

以外と犬小屋にいないので、なんでかなと思ったのだが、実は犬小屋は夏は暑く、冬は寒いのだ。

夏は熱がこもり、冬は冷気が入り込み、夏は暖房、冬は冷房という冷暖房完備の犬小屋になってしまっていた。なんとかしてあげようと家族であれこれ考え、まず夏は犬小屋の横の壁を外して熱がこもらないようにした。蚊が犬小屋に入るので蚊取り線香をたくようにもした。冬は犬小屋の中には毛布を敷き、入り口はカーテンを付けて冷気が入らないようにした。ちなみに横の壁は冬は打ち付けている。もう至れり尽くせり。それ以来、犬小屋によくいるようになったがある時、クンクンの姿が見えなくなってしまった。犬小屋にはいないし、庭を探し回ったところ、なんと縁台の下にいた。しかも様子がおかしかった。声をかけて覗こうとすると、牙を剥いて

「ウー」

と低い声をだすのだ。何が起きたのかわからない。僕なんかクン

クンのその様子にビツクリしてしまった。

「子犬がいるよ。」そう叫んだのは姉だった。よくみるとクンクン後ろに隠れるようにして子犬がいた。その数5匹。ある日突然5匹もの子犬が庭の縁台の下にいるのを見てびっくりしない人はいないだろう。家族は大騒ぎだった。

生まれて間もないころは子犬は母であるクンクンの後ろに隠れ、覗こうとしても母犬が文字通り睨みをきかせているので、子犬を見ることはあまりできなかった。

それにしても縁台の下とはよく考えたものである。縁台の下という狭いように思うが、クンクンは準備よく下の土を掘り下げていたので意外と空間があった。またさらに縁台が屋根のように覆ってくられていて、中を伺う人達から守れる様になっていた。

それでも子犬が歩き回るようになるとクンクンも以前の穏やかな顔に戻った。僕たちが子犬を抱き上げたりしても、側で目を細めて見ている。もちろん、子犬同士がケンカしたり、いたずらをしたりすると、側に行つて言い聞かせるような仕種を見せるところは母親の姿だった。

動物（人間も含めて）の子供というのは本当に可愛いものである。子犬がじゃれあっているシーンなどは本当に可愛い。今その光景が目の前にあるのだ。僕はこの子犬を手放したくないと思った。でもそうはいかないのが現実だった。親子合わせて6匹の犬を飼うのは我が家では無理だった。子犬にはもう相当愛着があった。

「飼おうよ。みんなで世話すれば大丈夫だよ。」

僕は子供心に勝手なことを言っていたのだが、結局、飼ってくれる人を探そうということになった。かわいがってくれる家にもらってもらおうと、家族は奔走した。友人知人に頼んだり、姉は飼い主募集の貼紙を作ったり。もともとクンクンとの出会いは拾ってきたところから始まるのだ。だから捨てるなんてありえない。これは家族みんなの思いだった。

家族総出で手を尽くし、幸いにも親戚、僕と同級生、父の会社の同

僚・・・5匹とも新しい飼い主のところ引き取られた。

僕の同級生に引き取られた子犬は、同じ町内に住んでいることもあって散歩の折りによく会った。母に会えるうれしさか子犬の方はいつもおおはしゃぎだった。

父の同僚が引き取ってくれた雌の子犬は大きくなって子供を産んだ。生まれた子犬は飼ってくれる人を探してみんな引き取ってもらったそうである。その家では動物の子が生まれるところを家族に見せて体験させたいから、とあえて雌を引き取ってくれたのだという。子犬が生まれることが体験できるのは素晴らしいことだと思う。

第4話 散歩道

クンクンは散歩が大好きである。毎日、散歩をさせるのが家族の日課で、誰かが散歩に連れていくのだ。一番散歩をさせているのは母であろう。飼い始める時に散歩をさせると言っていた僕たち子供は実際のところはあまりさせていなかった。よく母からはそのことを言われていて、その度に僕は

「お姉ちゃんよりたくさんさせてよ。」
などと五十歩百歩な言い訳を繰り返していた。

大きくなったクンクンの力は強く、散歩をさせているというよりはクンクンに引つ張られて散歩をさせられているみたいだった。散歩に行くのはいつもクンクンの気分しだいだった。長く歩き回る時もあるし、早く帰宅したがる時もある。クンクンは雨が嫌いで、雨が降っていると散歩には行こうとしない。散歩に誘っても

「なんでこんな雨の日に散歩なの。」

という顔をして、ぷいと顔を背けて小屋にこもってしまう。散歩の途中で雨が降り出そうものなら家へ急いで帰ろうとする。よく家の方向を覚えてるな、と思うのだが、自ら家の方向に向かっていく。逆に雨が続いた後の晴れた日なんか、ここぞとばかりに歩き回ろうとする。こっちがいい加減に疲れて家まで帰ろうものなら、我が家の前まで来てるのに

「この家は我が家じゃないよ。」

という顔をして通り過ぎてさらに歩き回ろうとするのだ。そして散々歩いた後、自ら向かう先は先程知らん顔をしたあの我が家であった。

クンクンは年に一回、市が行う予防接種を受けている。何箇所かの会場で行われており、我が町内のはずれにある公園もその会場になっている。でも、クンクンは注射が嫌いである。連れていく時は散歩だと言って誘うのだが、感のいいクンクンは行きたくない駄々

をこねる。結局は無理矢理引つ張って連れていく。

でも力のある犬が行くのを嫌がっているを引つ張るのは大変なことだ。さらに会場に着いても獣医を前にして暴れて抵抗する。いくら予防接種はクンクンのためだと言いつてもだめで、クンクンはただ注射を嫌がるのみである。毎年なんとか苦勞の末に予防接種を終えている。

注射といえば、動物病院に連れていくのも一苦勞である。具合が悪くなると動物病院に連れていくのだが、だいたい注射を打たれることになるので行くのをいやがるのだ。ある時、クンクンの様子がおかしいことに気付き、側に行つて身体を撫でてやったところ、

「キャン！」

とクンクンが悲鳴をあげた。足を触ると痛がるのがわかり、これは足の骨でも折つたかと車に乗せて母と動物病院に向かった。この時ばかりはクンクンはおとなしかった。診察する先生のことを不安げに見つめていると、おもむろに先生がこう言ったのである。「これは神経痛ですね。」

その診察結果に待合室にいた他の人たちからも驚きの声があがった。

「犬に神経痛なんてあるんですか。」

犬には似つかわしくない病名だったことに驚いてしまった。と同時に深刻な状態でないことがわかりホツとした。

「しばらくすれば直ります。」

先生の言葉通り、無事直つた。それにしても犬が神経痛とは。

第5話 車に乗って

動物病院に連れて行った時、クンクンはおとなしかつたといったが、おとなしく車に乗ったのは後にも先にもあの時だけだった。クンクンは車に乗ると車酔いしてしまう。初めて車に乗せた時は、だんだん落ち着きがなくなりそして酔ってしまったのだった。それ以来、クンクンは車に乗るのを嫌うようになった。犬が車に乗り、窓から涼しげに顔出している光景を見かけることがあるが、我が家には无缘だった。

困るのは家族で旅行に行く時だ。

車に乗ってくれるなら一緒に行けるのだが、それができないのだ。家に置いていくとなるとクンクンのえさをどうするかが悩みの種になる。試しに何回分かのえさを並べてみたが食べてもらえなかった。朝夕の時間に誰かがあげないとだめなようで、しかもえさとなると誰があげてもいいわけではなく、家族か余程クンクンが信頼している人でないとだめだった。近所にクンクンを特に可愛がってくれている御婦人がいる。

その方は自分でも犬を飼っていて本当に犬が好きだった。クンクンはその方に撫でられたりすると目を細めて気持ちよさそうだった。時々おやつ之差し入れもしてくれたりして、逆にクンクンはその方が庭の前を通ろうものならおやつをねだったりする始末。ただ、その方もいつでも犬のおやつを持ち歩いているわけではないので、時には

「クンクンごめんなさいね。今日は手ぶらなのよ。」

ということもあったが、その方ならと、無理を承知でえさやりをお願いしたところ、二つ返事で引き受けてくれた。それ以来、旅行などで不在になる時はえさやりをお願いするようになった。そして帰宅するとお土産を持ってその方にお礼に行った。

一度、その方の都合が悪くてお願いできない時があった。その時は

散々迷った末、車に乗せて一緒に行くことにした。車酔いするのがわかってるので一計を案じ、酔い止めを飲ませた。車に乗る際に嫌がったが、家族総出で車に乗りこんでいるのを見てついていくしかないと思ったようである。落ち着かない様子だったが、酔い止めのおかげか、無事に目的地に着いた。行った先は海の近くの保養所で、シーズンオフで人がまばらな砂浜にクンクンを連れていった。クンクンは生まれて初めて見る海にびっくりしつつも楽しそうだった。帰路の車の中ではやっぱり落ち着かなかったが。

第6話 雷鳴

車に乗ったクンクンだったが、クンクンは室内犬ではないので家中や車の中には基本的には入らない。入れないと言った方が正しい。我が家の庭が文字通りクンクンの庭だった。でも家の中に全く入れないのかというとそうではなかった。実はクンクンが家に入れる時があった。

ことの始まりはこうだった。ある日、夕立で雷が鳴り出した時のこと。初めて聞く雷鳴に驚いたクンクンはものすごい声で吠えたのである。あまりの吠え方にこっちが驚いてクンクンの様子を見ようと窓開けたとたんに勢いよく家の中に飛び込んできたのだった。制止する間もなかった。窓が開いているので雷鳴はよく聞こえて、鳴る度にクンクンは怖がっていた。雷を怖がっていることに気付いて慌てて窓を閉めると、雷鳴が多少聞こえなくなったためか、クンクンは落ち着きを取り戻した。クンクンが家に入ったのはダイニングの庭に面した窓際で、でも初めて家に入ったので勝手がわかっていなかったのだろう、すぐにそこを離れて部屋を徘徊しだした。ついにはちよつと目を離れた隙にソファーに寝そべってる始末。父は怒っていたが、僕は雷が怖いとか、ソファーが居心地がいいとか、犬も人と同じなんだと笑ってしまった。

クンクンが怖いものは雷だけではなかった。地元では毎年花火大会があつてたくさんの花火が打ち上げられるが、花火の音も怖がつて家に入れてくれと吠えてきた。どうもあの爆音が嫌いなようだった。音が多少なり聞こえなくなると落ち着くのか。

それだけではだめだったようだ。

ダイニングの窓際にマットを敷いて、家に入る時はそこだけと言いついて聞かせていたところクンクンもわかつてそこだけにいるようになった。そんなある日の夕方、その日は家には僕しかいなかったのだが、雷が鳴りだしてクンクンが騒ぎだしたので家に入れてやった。いつ

もの一階のダイニングの窓際に入れて、僕は二階の自分の部屋に戻った。雷鳴やガタガタ鳴る窓の音などこれはクンクンだけじゃなくて僕も怖かった。しばらくして、机に向かっていた僕はカタカタという音を聞いた。窓の鳴る音とも違った。不気味な感じがしていたところに、背後に気配を感じて振り向くと僕の部屋の入り口にクンクンがいたのだ。

「わーっ！」

僕は雷鳴より大きいのではないかと思う位の声で驚いた。

「キャン！」

クンクンも驚いたようである。それにしてもよく僕のいるところを探したものである。僕はクンクンに感心してしまった。僕が側にいるとクンクンは落ち着くようで、結局僕はクンクンと一緒にダイニングにいたことにしたのだった。

そのことがあって以来、クンクンを家に入れる時はダイニングの出入口のドアを閉めるようになった。でもそのことでまた騒動が起きた。ある雷の鳴る日にクンクンを家に入れた時のこと。母はダイニングのドアを閉めて別の部屋に行ってしまった。

ダイニングに取り残されたクンクンは別の部屋にいる母のところに行こうと出入口のドアを開けようとした。しかし、クンクンはドアの開け方を知らず、ただひたすらドアを引っ掻いていた。木製のドアは無残にも傷だらけになってしまった。でも、クンクンは恐怖のあまり必死だったのである。怒るに怒れなかった。さらに、家に誰もいないある雷の鳴る日のことである。

いくらクンクンが叫んでも誰も家に入れてくれないことにしびれを切らしたのであろうクンクンは庭を脱出してしまった。なんと、クンクンを可愛がってくれていてえさやりなども頼んでいる方の家の庭に逃げ込んだのである。その方に見れば、家の庭から聞き覚えのある犬の鳴き声だったので庭を覗いたところそこにクンクンがいたので相当びっくりされたようである。こっちもびっくりである。よくその方の家がわかったものである。ほんとに雷の鳴る日は、ク

ンクンだけにしてはならない。

第7話 消えたぬくもり

クンクンはいろんな面を見せてくれる。よく考えてるなと思わせてくれる行動を見せてくれる時もあるし、苦手なものを前にした時のうるたえぶりなどは思わず笑ってしまうこともある。

クンクンは世間的には犬でありペットであるのだが、僕たちにとっては家族の一員だった。家族とともに過ごし、家族とともに成長した。我が家の庭にきたのはまだ生まれたばかりの時だったので、父母は子供をみるように見守ってきただろうし、僕や姉兄は子供の頃から一緒にいるので、共に成長してきたという思いがある。クンクンは子犬から成犬になり、そして年老いていった。

老いるというのは人のそれと変わらない。茶色だった毛並みに白髪が混じるようになり、いかにも老犬といった風貌になってしまった。体力も衰え始めて、散歩に行く時も、散歩し足りなくてさらに行こうとしたかつて勢いはなくなり、歩くペースはゆっくりで、適当なところで切り上げて家に帰ろうとするようになった。しかも散歩に行くこと自体を毎日せがむことがなくなって庭でのんびりしていることが多くなった。縁台の上で寝そべっている姿は、よく老婦人が庭先の縁台にたたずんでいるそれと同じだった。

庭で暮らすこと、それは年老いても変わらなかった。クンクンはだいぶペースダウンしたとはいえ、マイペースで庭を闊歩していた。庭は後にも先にもクンクンの居場所であり、我が家の温もりが庭にあった。庭にクンクンがいることが当たり前でこのことであり、僕はこれから先もそれが続いてほしいと思った。

クンクンももう生まれてから18年目の冬を向かえていた。思えば長い年月である。

人は寿命が80歳だのなんのというのに比べればたいした年数ではないように思われるかもしれないが、犬の歳のとり方は人と違って早く、クンクンは人の年齢に換算すればもう80歳代であった。体

力も落ち、身体も弱っていた。冬の寒さのせいかやたら咳こむようにもなっていた。獣医に診てもらっても、老体に無理な治療はできないと言われてしまい。せめて寒くないようにと家の中のいつもの位置に入れてあげることにした。それからの数日間は家の中で過ごした。

「いい加減起きなさい。」そう母に言われて僕は慌てて起き上がった。週末と言えばだいたい昼頃まで寝ているのだが、とにかくクンクンの様子が気になり、僕は階段を駆け降りた。クンクンは今にも消え入りそうな表情で僕の顔を見上げてきた。撫でてやるとクンクンは目を細めた。父、母、僕はクンクンを見守りながら予感するものがあつた。そして、まもなくクンクンは永い眠りについたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5454b/>

庭のぬくもり（愛犬と過ごした18年）

2011年8月11日02時32分発行